

日銀事務所長の あさひかわ経済 あれこれ No.30

地酒を観光資源に

先日、3年振りに開催された「北の恵み 食べマルシェ2022」に行ってきた。大勢の人が行き交う中で、普段あまりお目にかかれない道北地域や道外の美味しい食べ物・料理を存分に堪能しました。規模を従来より縮小したうえ、天候が今一つだったこともあって、期間中の来場者数は3年前の6割ほどに止まった(前回104万人)

↓今回63万人)とのこと
です。もともと、コロナ禍の中でこれだけの規模の食のイベントを、大きな混乱なく開催できたのは素晴らしいことです。旭川市をはじめ、関係者の方々にとっては大きな自信になったのではないのでしょうか。ウィズコロナの中でのイベント開催のあり方として、1つのモデルになるように思います。

と地ビールメーカー1社のお酒を思う存分飲み比べできるイベントです。普段だと昼間からお酒を飲むことに何となく罪悪感を感じてしまうのですが、こういう時は別です。開放的な空間で実に気分よく飲みました。コロナ禍でこうしてお酒のイベントも中止や開催見送りが続いています。今後は、今回の経験も活かして、これまでとは違った形でイベント開催がなされることを願っています。

今回イベントを通じて、私が思ったのは、地酒の観光資源としての活用です。イベントは、消費拡大のきっかけになり得ますが、やりっ放しではその場限りになってしまいます。人を呼び込むためには、イベントを平時における活動に繋げていくことが大切です。イベントをきっかけに、観光客が酒蔵を訪問して歴史や味の原点に触れ、その地域の酒と食事を楽しむことでファンになってくれれば理想です。旭川では、これまでも個々には酒蔵見学などの取り組みが行われていますが、地域を挙げて観光客を呼び込むための取り組みは少なかつたのではないのでしょうか。複数の酒蔵が連携し、地域を挙げて取り組む方が観光客に魅力を伝えるのではない

かと思っています。観光客を受け入れる際には、衛生面への配慮と受け入れ時の対応かと思えます。衛生面では、問題になり得る場所に入れないように、よく、私が経験した見学ツアーでも貯蔵庫や資料展示を見た後、試飲して終了というパターンが多かったと思います。フランスのワイナリー見学でも、セラー見学と試飲の組み合わせという場合がほとんどです。受け入れ時の対応については、旅行会社やイベント会社などを活用する手もあるかと思えます。

インバウンドに関する入国規制は、徐々に緩和が進んでいます。現在は、ワクチン接種済みのツアー客(添乗員なしで可)に限定されていますが、このまま国内感染が落ち着けば、いずれ個人客の受け入れも可能になるでしょう。これに備えて、外国人観光客を旭川に呼び込むための環境整備に取り掛かることが得策です。日本酒の輸出は、コロナ禍でもアジア、米国を中心に伸びており、地酒は外国人を呼び込むための有力なコンテンツになります。旭川の日本酒は、国税庁主催の鑑評

会で何度も金賞を受賞するなど、その品質の高さは折り紙付きです。地域の日本酒と食事を楽しむ観光客を増やすことができれば、それに携わる人々の草の根的な活動を通じて、日本酒への理解と魅力の再認識が進みます。そうした取り組みを継続することが、地域の日本酒のファンをさらに増やすことに繋がっていくのではないかと思えます。(毎月第四週に掲載します)



【大賀健司(おがけんじ)】一九六五年神奈川県生まれ。青山学院大学法学部卒。業務局企画役、青森支店次長、政策委員会企画役、静岡支店次長を経て二〇二〇年に旭川事務所長に就任。